

小笠原の過去と歴史を読み解く

ヨナス・ルエグ インタビュー

ヨナスと知り合ったのは、サマーフェスティバル・ポニタイムの「Youは何しに父島へ？」の撮影のために町を歩いていた外国人に声をかけていた時だった。てっきり観光客だと思って話を聞くと、小笠原の歴史について研究しに来ていると、驚くほど流暢な日本語で説明してくれた。さらにハーバード大学院で研究していると知って度肝を抜かれた。

日本の視点とは異なる方向から小笠原の歴史を捉える彼の話は面白かった。今年の春にヨナスが再び島を訪れた際はUSKコーヒーで島民を交えたORB主催の歴史トークイベントも開き、小笠原の歴史と古地図について話し合う機会も作れた。今回は彼自身の研究と歴史に対する思いについて話を聞いてみた。

どんな経緯で小笠原に興味を持つようになったのですか？

ある時バックパッカーの友人が地図で小笠原を見せてくれて、光るキノコの話をしてくれました。インターネットで島の地理と歴史について調べ、好奇心が芽生えました。小笠原の島々はまぎれもなく日本に属していますが、でも日本の他の地域からこんなにも離れている。一般の日本史では、日本が海を越えて植民地化を進め始めたのは明治時代以降だと教わります。そこで自分の中で疑問が浮かび上がり、それについて調べようと思いました。しかし日本の歴史と小笠原の歴史の接点についての詳細な資料は非常に少ないことが分かり、さらに興味が湧きました。そして2013年に初めて小笠原を訪れて素晴らしい出会いと経験がありました。まるで楽園を見つけたような思いでしたね。

その2年後に修士論文のテーマについて考えていたのですがなかなか決められないでいたとき、小笠原の歴史について書こうと決めました。小笠原についての文献はまだ少なく、きっと面白い発見があると思ったからです。そして実際、小笠原は日本の近代化において重要な場所でした。

具体的にどのように小笠原は重要だったのでしょうか？

僕は小笠原が日本の最初の海外植民地であったと考えています。1862年に徳川幕府は小笠原の領有権を主張し開拓を始め、島の外国人定住者たちを支配下に置きました。蝦夷ヶ島(北海道)や琉球諸島(沖縄)の方が先に植民地のような存在だったと主張する歴史家もいるかもしれませんが。しかしこれらの地域は時間をかけて経済的に統合されました。例えば、アイヌ人は日本と貿易しており、漆器類などは彼らの儀式などに欠かせないものになっていきました。さらに日本の「企業」から仕事を引き受けることによって対価を得て、彼らの生活様式は大きく変わりました。日常で必要不可欠となってしまった道具を作る技術を持っていなかった彼らは、日本に頼らざるを得なくなりました。

一方、小笠原の状況はある日突然、港に大砲を構えた軍艦が現れ、住民に「この島は日本の一部であるため、ここに住む者は皆、日本の法律に従わなければいけない」と言われたようなものでした。自国の領地内に住む人々がその国の人間として帰化させられるというのは非常に近代的な支配関係でした。

明治政府は1870年に身分制度を廃止、その時期に「帰化人」という呼び方が日本国籍を持つ外国人に対して使用され始めました。僕が知る限り、小笠原の「欧米系」の人達は日本で初めて自国の国籍を放棄させられ、日本国籍を与えられた人達でした。これらの事実から公民権や領有権の主張といった後の日本の近代化を象徴する出来事の多くが、小笠原で実験的に行われたと言えます。

それでは日本の近代化は小笠原から始まったということですか？

帰化は明治に入ってからなのですが、その過程は徳川幕府時代から始まっていました。ポート・ロイド(二見湾)を管理下に置く際、入港する船を誘導するために幕府の役人は日本の国旗をイギリス人である島民のトーマス・ウェブに託しました。それは徳川の家紋の旗ではなく、日の丸の旗でした。当時の太平洋では多くの船や植民地が自国の旗を掲げ、領有権を主張していました。その中で徳川幕府も日本の国境及び文化的境界線を考え直す必要がありました。白人が果たして日本人でありえるのか、おそらく初めてそのようなことを考えたでしょうね。

興味深い見解ですね。では研究対象は日本の国家についてなのですね？

もう一つ興味ある分野は小笠原の環境史です。しかしこれはとても複雑な歴史です。興味深い点として、小笠原の環境の変化は極めて短時間の中で急激に変わりました。多くの種が絶滅し同時に多くの生き物が導入されました。なので現在は新しい環境バランスを形成する過程にあるのかもしれませんが。

歴史的観点から見ると、環境は政治や権力、そして民族性によって形成され、その逆も然りです。小笠原のヤギは元マナサニエル・セーボレー達が食用に持ち込みました。島に住みつけた日本人は逆に杉や竹を植えました。太平洋から訪れた人たちはサツマイモやパイナップルなど南洋のフルーツを育て始めていました。文化や生物学をのぞくことによって小笠原特有の歴史やグローバル化の環境的影響について多くのことを知ることができると思います。

なるほど。しかし日本の歴史について勉強するには日本にいた方が自然にも思います。敢えて外国に拠点を置いて日本の研究をすることにどのような利点がありますか？

個人的には感じる利点はここでの歴史研究に対する姿勢です。僕の焦点は歴史の概念的な研究についてです。ハーバードはそのような観点をもって歴史を考える場所として、最適な環境です。とても自由に研究テーマや方法を選べます。しかし同時に日本と小笠原に訪れる機会も多くあります。そこには大切な友人や歴史を細かいところまで知っている歴史家、そして多くの重要な資料があり、それらは僕に不可欠なものです。それに僕は日本食が大好きです(笑)。

また、やりがいのある点として、ある国の歴史を遠くから観察して研究するときに、その歴史を語る活動です。関係が全くない人達にどう興味を持ってもらうかを考える必要がある訳です。小笠原を知らない人達と話す、常にその歴史の面白さを伝える方法を考えさせられるのです。専門家にとって自分の殻を破り、より広い聴衆に伝えるというのはかなり難しいことですが、非常に楽しいことでもあります。

確かに、専門的な研究をより多くの人に伝わりやすくするための工夫はとても重要なことだと思います。では次に、歴史を研究するということにはどのような意義があるのでしょうか？

まず、過去の過ちを繰り返して欲しくないという思いがあります。時には儚い望みですが、歴史を研究する根本的な理由の一つであると思います。例えば戦争はどの時代でも繰り返され、これからも起きるでしょう。しかしそれは歴史の研究が無駄だということにはなりません。歴史は人間にとっての一種の思考モデルにもなり得ます。自分が住んでいる場所はかつてどのような所だったのか、自分の祖先はどこから来たのか、彼らやその場所はどのように変化したのかなど、これらの疑問は自然と湧いてくるものです。それは自分の出自に関わり、喋る言葉や着る服と同様にアイデンティティーだからです。

我々の歴史の概念はその時代によって変化し、広がります。そしてこれは非常に政治的な成り行きでもあります。多くの国の歴史には英雄や神話があり、それらは信憑性と人々が共有できるアイデンティティーを浸透させます。企業や大きな組織はそれぞれの正しいと認める公式な歴史を保持するものです。国は学校で何を教え、何が伏せられるべきかを決めます。歴史家の理想はこのような利害が混同する世界で、固定概念に縛られていない視点から歴史を読み解ける方法を探し続けることです。彼らは様々な場所や時代と比較できる歴史的パターンを探し出し、仮説を裏付けする信頼性のある資料を元に、大きな疑問を投げかけるのです。

最後に、正しい歴史というものにたどり着くことはあるのでしょうか？

先ほど話したように、過去を形成するのは現在です。我々が明治時代について考えていることは50年前とは異なります。なぜなら現在の世界は50年前の世界とは違うからです。例えば、我々にとっての過去が生み出した現代は第二次世界大戦以前に生まれた人達や戦後経済成長期に生まれた人達とは違います。今の時代の人々にとっての社会的問題は不安定な雇用問題、少子化、そして地方経済の衰退なのかもしれません。僕は個人的に環境問題が最も大きな課題だと思っています。これらの出来事は自分自身の過去の見方や求める答えについてのヒントとなります。

50年後の人類がどのような問題に直面しているかは分かりません(環境問題は更に深刻化しているでしょう)。故に我々が考える小笠原の歴史もこれから変化し続けていくと思います。そのため、我々が自分達の世界を通してナサニエル・セボレーやその時代に小笠原に住んでいた人達について考え続けていく限り、彼らは私たちの中で生き続けるでしょう。

Unraveling the History of the Bonin Islands with Jonas Rüegg

I met Jonas Rüegg just by chance one summer during his visit to Chichijima. When I learned that he was visiting for his research of the history of the islands at Harvard University, I became deeply interested with his studies and interpretation of the past in this unique area of Japan. In his previous visit we held a history talk event at USK Coffee with Jonas and some locals. For this article I asked him a few questions about his findings and perceptions on history itself.

How did you become interested in Ogasawara?

A backpacker friend of mine showed me the islands on a map and talked about some fluorescent mushroom. I looked it up on Wikipedia and became much more intrigued with its geography and history. The islands were a part of Japan, yet they were so far away from the rest of the country. In basic Japanese history we are told that before the Meiji period, Japan never sailed across the sea to build colonies, so I began looking into how this made sense. As I searched for more details regarding the background of the islands, I learned that there were very few materials about the history of Ogasawara that link to the greater history of mainland Japan. That's when I became really interested in studying the islands. It all came from a spontaneous curiosity. Then I decided to actually visit Ogasawara for the first time in 2013 and I just had a great time and met wonderful people. It was like being in paradise.

Two years later, when it came to find a good topic for my master's thesis, then the idea of digging into the local history of the Bonin Islands crossed my mind. Not much had been written about the islands, but I felt that there must be something special there. And luckily, the islands turned out to be an important locus in the history of Japan's modernization.

What did you discover about the history of Ogasawara?

I think Ogasawara was the first overseas colony of Japan. Strikingly, it was the Tokugawa government that claimed and opened the island as early as 1862, taking control over its non-Japanese population. Some historians may argue that Hokkaido and the Ryukus were a sort of colony as well, but the situation in Ogasawara was very different. Hokkaido and the Ryukus were gradually integrated economically into Japan. For example, the Ainu traded with Japan and some items such as lacquerware became essential tools for their ceremonies. They also started to work for Japanese "companies" and earned wages, which was a process that profoundly transformed their livelihood. They continued to rely on Japan since they did not possess the skills to produce these items on their own.

In Ogasawara, in contrast, one day a cannon boat appeared in the port, and the people were told "By the way, this is Japan, and you are all Japanese subjects". The idea that inhabitants of a national territory become national subjects of that state is a modern idea.

The Meiji government had just abolished the samurai status in the 1870s, when the term “Kikajin” (naturalized foreigners) became used to refer to foreigners who became Japanese subjects. To my knowledge, the “ōbeikei” (western descendants) of Ogasawara were the first people in Japanese history that were pressured to renounce foreign citizenship and take on Japanese nationality. In other words, some essential modern features of the modern nation state such as citizenship and territorial sovereignty (modernization) were attempted or experimentally applied in Ogasawara before they were transported into the larger scale of Japan.

Then the transformation didn't happen until the Meiji period?

It actually began under the Tokugawa. When they first seized control over Port Lloyd (Futami Bay), Tokugawa officials handed the Japanese flag to Thomas Webb, who was a local and British national, in order to guide vessels entering the port. Notably it was a Hinomaru flag (the rising sun), not a kamon (family symbol) of the Tokugawa. In order to claim Ogasawara as their territory and space in the Pacific world, populated by ships and territories flying their own national symbols, the Tokugawa had to redefine the nation and its cultural boundaries. Could a white man be Japanese? This is a question they probably hadn't pondered about before.

So your research is all about the Japanese state?

Another area I'm hoping to look into is the environmental history of Ogasawara. However, it is very complex. What makes it really exciting, though, is that the transformation of the environment has happened over a very short period of time and it is quite radical. You have many species that have died out and many that have been introduced, and it's probably in the stage of trying to create a new equilibrium. Thinking about history, you can see how politics, power and ethnicity shape the environment and are determined by it, too. The goats are in Ogasawara since Savory was used to eating mammals. The Japanese, in contrast, tried to grow cypresses and bamboo. Other settlers from the south Pacific brought yams, pineapples and other tropical fruits, which the Japanese examined with great interest. Intersecting culture and biology, I think, can tell us a lot about Ogasawara's unique history.

That's an interesting perspective for viewing history. However studying in Japan would seem like a more natural choice for your research. Are there any advantages for studying in a foreign country?

For me personally it is all about the approach to how we study history here. As I mentioned, my focus is on more conceptual aspects of history. The academic culture at Harvard allows me to expand big picture ideas. However, I often have the chance to visit Japan and the Bonin Islands as there are many important resources – such as friends that know the place and historians that know specific sources – that I wouldn't find in America. Besides that, I love Japanese cuisine.

A productive challenge of studying the history of a place far away is that you are forced to convince people that otherwise wouldn't care, of the relevance of that place's history. For people who have no personal connection with Japan and never heard about the Bonin Islands, why would they listen to your story? So, you are always on the mission to clarify for others what makes this so fascinating. Breaking out from your bubble is surprisingly difficult for specialists. But it can be great fun, too.

I understand, presentation is a hugely important factor when trying to share something that may at first seem less interesting to others. Then next, how would you explain that studying history matters?

Of course, there is always the hope that people won't repeat the mistakes of the past if they know history. This is definitely one of the fundamental – if sometimes futile – purposes of our endeavor. For example war happens again and again and it will probably always happen. But that doesn't mean that historians have failed. It also has the purpose of serving people as a model to think. What was life like in the place I live now, where did my ancestors come from, how did it change, these are questions that people are naturally curious about because it's a part of their identity, just as the language they speak and the clothes they wear.

Our imagination of history changes and expands in dialogue with the present. And this process is highly political. Nations have heroes and myths that spread trust and a sense of shared identity. Companies, parties and institutions have their official histories that represent an approved view of the past. Governments decide what ought to be taught at school and what ought not. The ideal is that academic historians follow the quest of finding an independent perspective in this confusion of interests. They try to make big statements to find patterns or trajectories that can be compared to different places or times, basing their theories in reliable sources.

Will there ever be an agreement on a correct history?

As I said, it is the present that shapes the past. Today we think about the Meiji period differently than we may have fifty years ago, since the world we live in is a different one from fifty years ago. For instance, we see a different present that the past has produced than people who lived before World War II, or than people that lived during the postwar economic boom. The problems that occupy us as citizens of the present may be precarious work, aging society, or the decay of rural economies. For me, global environmental change is one of the most pressing issues. This informs how I look at the past and the sort of conclusions I look for. We cannot know what people in fifty years from now will be dealing with. (I believe environmental problems will be even more pressing than today.) The history of Ogasawara will therefore never be conclusively told, either. Nathaniel Savory and his fellows stay alive in our imagination as long as we keep discussing the world they lived in through the lens of the world we live in.